



香川県 愛染興業株式会社
 「子供達による瀬戸内海の
 環境維持改善活動の継続」
 事業



愛染興業株式会社
 代表取締役 社長
 文 基源さん

選考理由

21世紀最大の課題は環境問題への関心を日々の暮らしのなかでも深めていくことだろう。愛染興行株式会社は社員の家族を中心に、保育園や地域の子どもたちにも声をかけ、汚れた高松市の海岸のプラスチックゴミを拾うなど清掃作業を続けてきた。同時に、タイ、ヒラメなどの稚魚の放流を行うことで、海の資源の育成にも貢献、楽しみながらふるさとの環境の改善に貢献している。2009年から12年間にわたる活動は子どもたちのこれからの生き方にも好ましい影響を与えることだろう。

社会貢献活動審査委員会
 委員
 永井多恵子氏



自然と親しむ体験から
 生まれてくる
 環境を守る意識を
 子どもに育む活動

従業員の家族や子どもたちが参加して
 瀬戸内海の海岸清掃と稚魚の放流

地球温暖化が進行するなかで、これまで以上に環境問題がクローズアップされている。地球に暮らすものとして、国籍、人種、老若男女などを問わず、誰もが環境問題に対してコンシャスでなくてはならないが、なかんずく地球の未来を担う子どもたちが、持続的な成長のためにも環境維持の重要性を自覚して行動することが重要と思われる。また、大人たちにとっては、そうしたきっかけや機会を子どもたちに提供することが求められる。

高松市を中心に香川県内に15ホールを展開する愛染興業株式会社では、2009年から12年間連続で高松市や坂出市の瀬戸内海に面した海岸で、子どもたちと一緒に清掃活動と稚魚（タイ、ヒラメなど）の放流を行っている。風光明媚な多島美で知られる瀬戸内海だが、場所によっては流れ着いたプラスチックゴミなどがたまった海岸があり、また近年の埋め立てや汚染により、漁業資源が減りつつあるといわれている。同社では、瀬戸内海の豊かさを守り、それを次の世代に残していくことを目的に、この活動を継続しているという。

活動に参加するのは、基本的に同社グループの従業員とその家族、関係する企業主導型保育所などの園児たちだが、小学生や園児たちは海水浴ができる格好で稚魚放流や海岸清掃を行い、それを手伝う大人たちは同僚や店舗間でのコミュニケーションの活性化を図っている。



稚魚放流活動を告知するポスター



12年間で約13,600匹の稚魚を放流し、
 加人数は延べ520名が参加

自治体や警察署などと連携しながら
 社会事象に即した社会貢献活動を実施

毎年、「海の日」の前後に開催しているが、これまでの12年間で、約13,600匹の稚魚を放流し、参加人数は延べ520名となっている。2020年は新型コロナの影響により規模を縮小して少人数で実施したため、マスコミによる取材や報道はなかったが、例年、報道各社が取材に訪れ、夕方のニュースで報道されており、地域住民、自治体、漁業関係者などからも高い評価を得ている。

同社では、この他にも地元の自治体や警察署などと連携しながら、人・モノ・予算のバランスを考え、社会事象に敏感に反応しながら、効果的な結果が出るよう創意工夫しつつ、様々な社会貢献活動に取り組んでいる。

継続して行っているものとしては、毎年8月に実施されている「24時間テレビ 愛は地球を救う」の趣旨に賛同し、全ホールが参加して募金（玉、コイン、現金）活動を展開し、毎回約100万円を寄付している。2020年で34回目となり、寄付額の合計は約3,400万円となっている。また、年間を通じて同社のホールがある高松市内の商店街の清掃を行い、商店街の方々から称賛されている。

さらに2020年5月には新型コロナの感染拡大でマスクが不足するなか、市内の保育所でクラスターが発生したため、高松市を通して市内の市立保育所、こども園、幼稚園に不織布マスク計10,000枚を寄贈した（香川県遊技業協同組合名義だが、発案およびマスク提供は同社）。また、同社では駐車場での子ども放置事案撲滅のための活動に積極的に取り組んでいるが、10月に同社のさぬき市内にあるホールの駐車場で実施された地域安全キャンペーンに協力し、駐車場の見回り担当の「車マネジャー」が新聞社やテレビ局の取材を受けた。